

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 82 号

2019 年 9 月

## 日本薬史学会2019年会（岐阜）のご案内

年会長 森田 宏（内藤記念くすり博物館館長）

日本薬史学会2019年会（岐阜）を下記の要領で開催いたします。本年会では、一般講演のほか、特別講演「認知症治療剤研究開発の潮流」（エーザイ株式会社執行役 ニューロロジービジネスグループ チーフデイス カバリーオフィサー 木村 禎治氏）、市民公開講座「認知症になりにくい食生活」（内藤記念くすり博物館館長 森田宏）を企画いたしました。

【開催日時】2019年10月26日（土） 開会10：00（受付開始9：30）

【会場】内藤記念くすり博物館

〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1

TEL. 0586-89-2101 / FAX. 0586-89-2197

【年会事務局】内藤記念くすり博物館 稲垣裕美、森田麻起子、瓜田美穂

eisai-yakushi2019@hhc.eisai.co.jp

【情報交換会】年会終了後、内藤記念くすり博物館内にて行います。

【研究発表演題の募集】募集は終了しました。お申し込みありがとうございました。

### 【年会参加申し込み】

参加申込書（書式は日本薬史学会 HP にあります）にご記入の上、年会事務局に2019年9月20日（金）までにお送りください。お振り込みも2019年9月20日（金）までをお願いします。

※メールの件名には「薬史学会2019参加申込（参加者氏名）」とご記入下さい。

宛先：FAX. 0586-89-2197 メール：稲垣裕美 eisai-yakushi2019@hhc.eisai.co.jp

### 【振込先】

金融機関名：十六銀行 川島支店／

口座種別：普通／口座番号：1263045

振込先名義人名：

内藤記念くすり博物館日本薬史学会森田宏

（ナイトウキネクスリハクブツカンニホンヤ  
クシガツカイモリタヒロシ）



## 【参加費】

①年会：会員（事前登録4,000円・当日登録5,000円）／非会員（当日登録6,000円）  
学生会員（要登録・無料）／学生非会員（当日登録1,000円）

②昼食弁当代：事前申込のみ1,000円

③情報交換会：会員・非会員とも（事前申込のみ5,000円）／学生（1,000円）

※非会員、学生非会員は当日登録のみです。

※当日登録時のお支払いは現金のみとさせていただきます。ご了承ください。

④歴史ツアー（27日）：10,000円（学会参加者／事前申込のみ）

【薬史ツアー】内藤記念くすり博物館探訪と国宝犬山城、下山順一郎碑巡り（貸切バスで移動／昼食付／予定）

## 【研修会受講シール交付】

本会参加者の方には日本薬剤師研修センターの研修会受講シールを交付いたします。シール手続きが変更となり、当日、①本人確認のできるもの（運転免許証など）と②薬剤師免許番号が必要となりました。お忘れなくお願い申し上げます。（手続きの変更点の詳細は日本薬剤師研修センターのウェブサイトにてご確認ください。）

以上ご参加をお待ちいたしております。

# 第12回柴田フォーラム報告

柴田フォーラム委員長 船山信次

日本薬史学会主催の「第12回柴田フォーラム」が、2019年（令和元年）年8月3日（土）に東京大学大学院薬学系研究科 南講義室（〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1）にて開催された。まさに猛暑の中、32名の方々が参集された。出席された方々に厚く御礼申し上げる。

開会に先立ち、船山委員長の挨拶の後、以下の2つの講演がなされた。講演1は、江戸時代の火薬作りの材料である硝酸カリウムが、伝承通り、古民家の縁の下などから実際に採取されたというお話、そして、講演2は、明治薬科大学に入学後、作家に転じて活躍されている先生のお話しである。

前者はいわば実験薬史学とでもいうべき領域のお話しと思え、後者は、薬学を学びながら、どのように種々の題材の執筆にも興味が広がったかをうかがえたと思う。

## ■講演1 塩硝づくりの歴史的経緯と古土法による再現実験の検証—江戸時代の火薬原料製造の実験的検証

14:00～15:20

野澤直美先生（日本薬科大学客員教授）

野澤先生は高校の化学の教師としてまた高校長として長く勤務された後、日本薬科大学において初年度学生に対する化学教育を担当されてこられた。現在もNPUサイエンスアカデミア（NPU＝日本薬科

大学）を発足させたりし、「子どもたちの科学する心の醸成」をめざしておられるとのこと。

今回の講演では、まず、古代中国での火薬づくりの発祥のお話しに始まり、その原料である硝石のことに話がおよんだ。どうやら火薬の発見は錬丹術の中で偶然に見つかったらしい。わが国には戦国時代までに黒色火薬や鉄砲は伝わり、鉄砲をつくることはできるようになった。しかし、黒色火薬調合に使われる3種の材料のうち、硫黄や木炭は手にはいるものの、硝石（硝酸カリウム）の入手には苦心したようである。わが国には硝石の鉱脈がないのであ

る。琉球経由でポルトガルや東南アジアからの輸入があったもののわずかであった。

硝酸カリウムは極めて水に溶けやすく、わが国は雨が多いために地面に染み込んでしまう。そこで目をつけられたのが古民家やお寺の床下の古土である。15～20年手付かずで雨のあたらない床下土の表面付近を集めると結構大量の硝酸カリウムが採取できることがわかり、これを「古土法」と称して硝酸カリウムの採取に応用したようである。そこで、演者らは、実際に古民家の床下から表土4 kgを集め、古来伝わっている方法で硝酸カリウムを精製したところ、そこから、硝酸カリウム 20.7 g (ほぼ収率 0.5%) が得られたという。ここにいわゆる「古土法」が実証されたことになる。

野澤先生がお住まいになっておられる埼玉県の秩父地方では年間400以上のお祭りがあるといわれ、その中で「龍勢祭り」はとくに有名である。秩父では江戸時代末から黒色火薬の製造がなされ、このお祭りでは、長い竹竿の先の方に火薬をつめた筒を取り付けたものを発射台に設置し、火薬に着火させて空中高く飛ばすのである。まさにロケットである。この講演の最後にはこの勇壮なお祭りの様子が披露され、一同、この動画も楽しんだ。

## ■講演2 薬学と医学とヒューマニズム

15:30～16:50

小林照幸先生(作家/明治薬科大学非常勤講師)

小林先生は、1990(平成2)年4月から2年半余の間、学生として明治薬科大学に在籍しておられた。その後、1992(平成4)年、奄美・沖縄に生息する毒蛇ハブの咬症被害の治療薬である血清製造に心血を注いで「奄美・沖縄の命の恩人」であるばかりでなく、東南アジアをはじめ世界の毒蛇咬症のリーダーとしても活躍された沢井芳男氏(元東大教授・元明治薬科大学非常勤講師も歴任)を描いた『毒蛇』

(小林照幸著)で、新設の文学賞である『開高健賞』(同賞は現在、開高健ノンフィクション賞に引き継がれている)の第1回奨励賞に選ばれ、同年5月に単行本として刊行された。このことから、学生作家としての活動が始まり、同年9月末には明治薬科大学に退学届けを提出し、作家活動に専念されることになったとのこと。

その後、2006(平成18)年4月からは明治薬科大学の非常勤講師をされておられ、マラリアと生薬、日本が根絶した感染症、海洋危険生物、毒蛇咬症などについて講義をされているという。また、2016(平成28)年より自治医科大学の医動物学の外部招聘講師としても講義もされておられるとのこと。

小林先生は情熱をこめて、フィラリアや日本住血吸虫などがもたらし、WHO(世界保健機関)により現在、「NTD(Neglected Tropical Disease)」と名付けられ、日本では「顧みられない熱帯病」という和訳があてはめられている、熱帯地域、貧困層を中心に蔓延している感染症、毒蛇咬症などの疾病などを中心に、大変に珍しいスライドを交えてお話しをされた。また、ハブ対策や、日本が根絶した2つの寄生虫の恐ろしさと戦後史を俯瞰し、それらの根底にある薬学と医学とヒューマニズムについても熱くお話しくださって感銘を与えてくださった。

柴田フォーラムの後、同日17時より薬学図書館1階ロビーにてビア・パーティが開催された。船山委員長長の司会により、明治薬科大学理事長の奥山徹先生の乾杯の発声に始まり、和気藹藹のうちにあっという間に予定の時間が過ぎてしまい、途中から参加された日本薬史学会会長の折原裕先生による挨拶と中締めとなった。

演者のお二人をはじめ、講演会参加者の8割にもあたる24名の方々がこのビア・パーティにも参加して下さり、大盛況であった。猛暑の中、そしてお忙しい中、御参集くださった皆様にあらためて感謝申し上げます。

## 「海外の薬史学会の今（3） ドイツ」

国際委員会 辰野美紀

2018年4月6日から8日、ドイツ薬史学会とスイス薬史学会の合同の総会並びに学会会議が、ドイツとスイス国境のボーデン湖畔のリンダウで開催された。テーマは、「薬学—技能から科学へ」であった。2年に一度のこの会議では、有名な St. Gallen 書誌図書館へのエクスカージョンを含む文化プログラムも企画された。なお、ドイツ薬史学会の2018年、2019年の詳細なイベントや出版物の情報については、ホームページを参照の事。また、ドイツ薬史学会の機関紙であるドイツ薬史学会誌は、オンラインで検索できる。また、オンラインでの機関紙への投稿も可能である。

2018年11月10日（土）、元ドイツ薬史学会会長で国際薬史アカデミー創始者の一人であり、マールブ

ルク大学薬史学研究所を創設した Rudolf Schmitz 教授の生誕100年を記念したシンポジウムが、マールブルク大学大講堂で開かれた。テーマ「薬史の未来」にそって、5人のシンポジストから興味深い提言があった。国内外からの薬史学、医史学、医療倫理学、医療文化史などの専門家を集め、活発な議論が交された。参加者は、約100名。

解説：マールブルク大学薬史学研究所は、ドイツの薬学部の中で、薬史学研究および教育においては最大の規模を誇る施設である。大学院制度（薬史学での博士号取得が可能）、留学生の受け入れ制度なども完備している。また、スイスの薬史学講座で取得した単位も認められている。

### 中部支部だより

## 中部支部報告

中部支部長 河村典久

2018年度 中部支部例会と講演会を開催しました。

日 時：平成31（2019）年2月16日（土）

場 所：金城学院大学栄サテライト

演題①：『本邦北限と南限の薬師如来像』

名城大・薬 奥田 潤

【要旨】薬師如来は薬剤師にとってもっとも関係の深い現世利益の仏である。その経典はインドで作られたが、唐の玄奘（602-664）が訳した薬師瑠璃光如来本願経一巻がもっとも有名である。その中に薬師如来が発した「十二大所願」があり、第六願に「諸根具足」、第七願に「除病安楽」を掲げている。

日本には仏像としての薬師如来像は、国宝14像、重要文化財（重文）だけでも250像近くあり、その90%は木造である。不空（705-774）が訳した「薬師如来」には「薬師如来像の左手に薬器を持たせる」と

あり、それ以後日本の薬師如来像に薬壺をもたせるようになった。しかし、薬壺は通常、で容器の形になっておらず、唯一の例外は周防国分寺（山口）の薬師如来像（重文）の薬壺で、その中に生薬などの内容物が入っていて、演者らが分析して報告した。

今回、本邦北限と南限の薬師如来像の所在と製像年などを調べた。未指定の尊像は不明な点が多く調査の対照とせず、県市町指定文化財、重文、国宝の尊像を調べた。調査方法はアンケートのほか、新全国寺社仏像ガイド（美術出版、2006）、文化庁：国宝・重要文化財大全（毎日新聞社、2000）によった。

北海道は明治初期まで開発が遅れ、重文として大日如来像（秘仏）、道指定阿弥陀如来像（5尊像）があるが、薬師如来像は存在しない。本州北限の薬師如来像は、町瑞龍寺所蔵の薬師如来像であり、14世紀後半の作像で北緯40°42'近くにあり、十二神将

をもつがいずれも朽像で町指定である。僅かに南に位置する弘前市（青森）の長勝寺の尊像は、県指定で1629（江戸前期）年の作である。つぎに39°52′に存在する秋田県男鹿市の長楽寺の尊像は県指定で1592（桃山時代）年の作である。重文として古い年代の薬師如来像は、奥州市（岩手）の寺の尊像は862年（平安前期）につくられたものである。その他東北地方に重文の8尊像がある。国宝としては、福島郡・湯川の勝常寺（創建807年平安前期）に薬壺をもち、8世紀末～9世紀初期（平安中後期）につくられた尊像があり、日光、月光菩薩像と四天王像、十二神将を備えている。

本邦南部の石垣、沖縄、鹿児島は歴史的な交易上、薬師如来像を信仰することが少なかった中国の影響のためか薬師如来像はない。本州南限の薬師如来像（重文）は宮崎市の王楽寺、熊本・八代市の医王寺（鎌倉前期、室町中・後期）に尊像がそれぞれ所蔵されていることが判った。その他、九州に10尊像がある。

#### 中部支部例会の講演会案内と演題の募集

日本薬史学会中部支部例会を下記の要領で開催しますので、会員の皆さんのご参加、ご発表をお願いいたします。なお、発表を希望される方は、演題、発表者等を中部支部事務局までお知らせください。

開催日時：令和2（2020）年2月8日（土） 13：00より

場 所：金城学院大学栄サテライト TEL. 052-955-8668

〒460-0003 名古屋市中区錦三丁目15番15号 CTV錦ビル4階 セントラルパーク地下街10A出口前

事務局：日本薬史学会・中部支部事務局長 飯田耕太郎（名城大学薬学部）

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150 TEL. 052-839-2710（直通）

#### 関西支部だより

## 第10回 関西支部研修会報告

関西支部 宮崎啓一

元号令和を目前にした平成最後の当学会関西支部における「第10回日本薬史学会関西支部研修会」が、平成31年3月16日（土）、16時30分より大阪富国生命ビル4階「まちラボ」ルームA（大阪市北区小松原町2番4号）におきまして開催されました。

今回の研修会では、一般社団法人 日本杜仲研究センター 理事・事務局長 頼萍先生（大阪大学 産

今後北海道、鹿児島、沖縄、石垣などの寺院に、薬師如来像が所蔵され、住民の心のよりどころとなることを望みたい。

#### 演題②：『東山植物園・伊藤圭介記念室『錦窠翁日記』について』

圭介文書研究会 河村典久

【要旨】名古屋市東山植物園・伊藤圭介記念室には、子孫からシーボルトより譲り受けたといわれる携帯式顕微鏡や、『ターヘルアナトミア』など膨大な資料が寄贈され、保存されている。中でも文政10年から明治31年に至る圭介の日記が『錦窠翁日記』として保存されており、圭介文書研究会では順次これを解読し、解説文を備えて毎年発行されている。これまでに第24集として明治13年までの日記について発行されている。この解読作業の苦労話や、このまま継続したとすると、すべての日記の解読には優に数十年はかかるのではないかと考えている。

業科学研究所 特任研究員）によります“神木杜仲は上品漢方薬”と題してご講演いただきました。

杜仲は、一属一種の稀な木本植物であり、中国では一本の杜仲があれば家がたつといわれた宝の木であり、本邦でも機能性食品素材としても重用されています。

今回は特に、中国、日本における歴史的な観点を

含めたご講演をお願いいたしました。

杜仲とは中国原産の落葉高木であり、学名 *Eucommia ulmoides*、トチュウ目トチュウ科の植物をいい、現在は中国原産の一種類しか存在しません。

杜仲は五大漢薬として知られる芍薬、鹿茸、朝鮮人参、冬虫夏草および杜仲樹皮に名を連ねており、杜仲樹皮は漢方薬・医薬品にも含まれ、不老長寿の薬になるといわれております。ちなみにロングセラー商品として知られる養命酒に含有する生薬成分として、杜仲の樹皮の存在があります。

一方で杜仲は「現代の生きた化石植物」ともいわれ、氷河期を生き伸びた強い生命力をもつ植物でもあります。杜仲が最も繁殖していたのは、恐竜時代末期の6000万年前から600万年前のことであり、ユーラシア大陸以外でも杜仲の化石が見つかっております。

『神農本草経』では不老長寿の強壮薬として収載されており、杜仲樹皮が含まれている漢方処方としては、杜仲丸、十補丸、大防風湯および千金保孕丸などが知られております。

現代医学においても分析と実証が進み、血圧降下、肝機能の向上、利尿作用、便秘の改善、精神的ストレスに対する抵抗力を増強、脂質代謝の改善、癌の抑制効果など様々な効果が認められております。

世界自然遺産である中国の絶景として知られる九寨溝や黄龍を有し、パンダやキンシコウの主な生息地として知られている四川省北部に古代民族・羌族の末裔といわれているチャン族が暮らしています。

四川省は全国の75%を占める中国国内有数の和漢植物の産地であり、杜仲もこの地方でよく見られる植物のひとつです。農家の庭先にも栽培されていますが、チャン族の人々は昔から杜仲を食用として利用し、健康の秘密はチャン族独自のこの食文化にあると考えられております。

当研修会において、頼先生からは杜仲を使用した料理のレシピをご紹介いただき、中医学理論と栄養学に基づく食事について解説くださいました。

本邦におきましては、大手製薬メーカーより製品化された杜仲茶について、多くの皆さまの知るところかと存じます。

本研修会の最後に頼先生は次のとおり、締めくくられました。

中国では3～5年のうちに杜仲関係の産業は急激に進展し、杜仲資源を増大し、各製品の加工など、開発研究の進展にとどまることなく、製品の販売、利用市場・投資を通じて地方経済の発展に大きな影響をもつものと期待されています。このような杜仲のもつ潜在能力に魅せられ、中国では国内外から多くの金融投資家が参加しつつあり、国家プロジェクトとして、杜仲の研究と産業との連携が急速に進んでいます。

研修会の参加者合計22名（懇親会参加者20名）のうち、生薬学・天然物化学の領域に関心をおもちの方々で半数ほどが占めておりました。

研修会後の懇親会におきましても、“杜仲”やその他の話題に花が咲いたようで、今回の研修会をきっかけに新規会員として当学会にご入会を検討く



頼先生の講演による研修会場の風景



懇親会の風景



一般社団法人 テラプロジェクト  
小林昭雄 理事長 (大阪大学名誉教授)によるご挨拶

ださる方もございました。

参加者、関係者の皆さまのおかげで本研修会を盛会に終えることができ、次回の開催に期待も込め、閉会いたしました。

今後も当支部としましては、生薬、和漢薬、家庭薬や伝統薬などをテーマに話題提供を試みる次第です。

最後に今回研修会場をご提供くださいました一般社団法人 テラプロジェクト 小林 昭雄 理事長 (大阪大学名誉教授)に感謝申し上げます。

## 〔Book紹介〕

小山慶太 著

### 「科学史人物事典 150のエピソードが語る天才たち」

新書版 344頁 920円 (税別) (中央公論社)

本書は中公新書「理科系」ベストセレクションに選ばれており、平積みされ書店で目を引いたため購入した。16世紀のいわゆる近代科学の黎明期から、現在存命中の人物まで、150人以上の科学者のエピソードを、時代順に原則見開き2ページでまとめている。紙幅の制限から、学術的業績の詳細は他書に譲り、業績面の記載については、やや物足りなく、別途基礎知識が必要な面もある。しかしながら、コペルニクスの肖像画のスズラン、論文等の発表先がない時代の先取権を守るための工夫、微積分の先取権が有名なニュートンとライプニッツのそれぞれの本業、パスツールの狂犬病ワクチンで命を救われた少年のその後、DNAの二重らせんをめぐるドラマなど、簡潔で魅力的な見出しとともに、それぞれの科学者の時代背景、人となり、人間関係が分かるような事例を生き生きと紹介している。取り上げられているのは、著者の専門分野である物理、化学の分野の科学者が多いが、古典を絶対視し、現実よりも古典を優先していた時代から、観察、実験に基づく近代科学の芽生え、職業としての科学者の登場など



が時代を追って理解できる。また、科学の普及・発展に貢献した翻訳者等も取り上げられている。全般に軽妙な文体で、新書版 (電子書籍版も併売) でいつでもどこでも空き時間に気軽に読めることが魅力である一方、巻末にはノーベル賞創設から2012年までの科学分野の受賞者一覧や、人名索引 (本文は時代順の構成なので大変便利) がついているなど、資料としても役立つ工夫がなされている。

(齋藤充生)

# 薬史往来 新しい年号「令和」偶感

名誉会員 山田光男

## はじめに

本年5月「令和」という新しい年号を迎えた。大正13年5月生まれの私は、4年号を生きて95才を迎えることになった。

## 徴兵検査の思い出

昭和19年5月、旧制松本高校在学中に徴兵検査の通知が来て、本籍地で受検した。当時、日米戦況は不利で、文科生は学徒出陣した状況で、担当軍医から10月からの進学大学を質問された。東京大学医学部薬学科と答えると、軍医から「近く米軍は東京攻撃を目指して、本土上陸を予定している」と言われ、薬剤師が必要との理由で「第2種合格・東京勤務」となった。

## 東大薬学科の講義

昭和19年10月からの講義は、木造平屋の通称バラック講堂で行われた。大正12年の関東大震災後の仮建築で、戦時中で再建築が遅れた為であった。2時間の講義は、軍服姿の助教授が軍帽・軍刀を机上に置いて黒板で講義した。終了後は軍装を整えて陸軍病院に戻られた。

戦時中の為、病院前の運動場で教練があった。当時、米軍 B29 が 1 万メートルの上で偵察飛行を行い、上野公園の日本軍高射砲が応戦するが、

7千メートル迄しか届かず、彼我の戦力の差は明白で、教練の授業は中止になった。

## 明治前日本薬物学史；帝国学士院発行

上記の薬学編（朝比奈泰彦主宰）が薬学科図書室にあるのを見付けた。朝比奈先生の長男で、後に南極探検隊に参加するなどした菊雄氏が私の旧制高校の先輩で、薬学科にも在籍し懇意であったので、本書を読むことで戦時中の薬学科の勉強に強い刺激となった。

## 日本薬学史

昭和23年7月、朝比奈先生が序文を精しく記述した531ページに亘る「日本薬学史」が南山堂から発行された。著者は、上記「明治前の日本薬物学史」を担当した清水藤太郎博士であった。同誌の2頁目に「医薬の名義：病を癒す動植物をくすり」という。原義は「令和」の意なり」という文章を見付けた。偶然とは言え、新年号「令和」を迎えて素晴らしいことと思う。

## おわりに

「薬史往来」の寄稿なので、記事中の西暦は避けたので了承がいたい。薬史学会員には、清水藤太郎先生の著書を座右の書としておすすめしたい。

---

## 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：小清水 敏昌

編集委員：荒木 二夫 久保 鈴子 齋藤 充生

---

## 薬史レター 第82号 2019年9月

編集人：小清水 敏昌 発行人：折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp

---